

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

● 出発点

昭和18年2月9日、中国大陸、青島（チンタオ）に生まれた。

私が1～2歳のころ、日本に引き上げて来たので、生まれ故郷の記憶は全くない。

チンタオの街はエキゾチックな雰囲気で綺麗だと父が描いた風景画からの印象である。

3隻の船が夜間、朝鮮半島の島つたいに本土に向けて航行し、昼間は島影に隠れた。2隻は潜水艦に撃沈され、私達の船だけが九州に着いたと母から聞いたことがある。

長野県の志賀高原に疎開し、戦後、藤沢市片瀬海岸の家で小学校に入学した。

親の都合で片瀬や鵜沼、鎌倉、葉山など、6つの小学校を転々とした。

小学生の頃は、授業についていけなかった。

当時、江ノ島の海は透明度が高く、サザエやアワビ、伊勢海老が素潜りで採れ、夏季は毎日マッチと醤油を持って西浦に渡り、流木で焚き火をしサザエを焼いて食べていた。

小学5年生の頃、両親は離婚し、父は新しい母親を家に入れた。その後、母親は2～3回、別の女性に変わった。私は三木家の長男として実質的に祖母に育てられた。

鵜沼中学校から県立鎌倉高等学校に進んだ。

七里ヶ浜の海沿いを走る江ノ電の鎌倉高校前駅の丘の上の校庭からは江ノ島と相模湾の先に伊豆半島や富士山が望まれた。風光明媚な環境でのんびりした高校生活を送った。

受験勉強に没頭した高校3年の時は1960年安保闘争にあたり、教師はストライキをし、デモに出かけていった。高校の授業は休校になり自習時間が多かったように記憶している。

数学が得意だったので、浪人せずに横浜国立大学・工学部に合格した。

1961年は横浜の清水ヶ丘の教養課程にいた。60年安保闘争が終焉し、どこことなく虚脱感とニヒルな雰囲気のキャンパスでは、日共・民青がフォークダンスに興じていた。

入学すると同時に親の家を飛び出し、横浜に下宿しアルバイトで自活生活をはじめた。授業をサボり美術部の部室に入りびたりにな

り、油彩や水彩画などを描いていた。鎌倉の学芸大学の美術科にヌードデッサンに通い、時々水泳部のプールで泳いだ。家庭教師を定期的に行なった。横浜港に停泊する貨物船の荷揚げ作業を監視するウォッチマンのアルバイトは一晩で数日間の生活費を確保できた。金がなくなると貨物船に乗った。当時、横浜には黒人米兵も多くモダンジャズ喫茶や根岸屋などの廉価な飲み屋で美術科や建築科の仲間と遊んだりもした。

カンニングなどしながら、どうにか教養課程の単位を修得し。弘明寺の建築学科専門課程に進級できた。専門課程でも単位はぎりぎり取得し進級していた。

が、設計製図の課題だけは常に目立つ作品を提出し評価は極めて高かった。

美術部で絵ばかり描き、公募展に入選するなど工学部、建築学科の学生の中では図面やパースなどの表現力の強さが抜きんでていた。

将来はすごい建築家になるのではと期待されていたが、建物の維持管理や修繕計画など極めて地味な仕事をやっているのを知って、「あの三木が何でこんなことやっているの」と驚かれたり、「これこそ時代の最先端だ」と賞賛されたりもする。



横浜国立大学時代の筆者（弘明寺の建築学科製図室にて）

みき・てつ

（有）共同設計・五月社一級建築士事務所主宰。1943年生まれ。建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、30年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。